

## スイスアルプス報告 . . . . Inside story in SWITZRLAND

<期 間> 2000年7月13日(木)~7月22日(土)

<山 域> スイス・ヴァリスアルプス

<目 的> ツェルマツ周辺の山々(マツターホルン他)のクライミングとハイキング

<参加者> 小倉龍彦 小倉恵 箕浦浩三 箕浦留美子 黒瀧信夫(※)  
前川秀夫 前川加代子(会外) 前田学 小嶋紀子 成田典子(会外)

### 出発

#### 7月13日(木)

<15:00> 後発成田さんを除く9名全員出発ロビー集合。お見送りは前田真澄さん1名。家を出る前から荷物の中身にクレームが入り、洪々ロビーにてスーツケースを開き、なにやら真澄さんから色々取り上げられているクマちゃん。(必要の無いものがいっぱい入っていた)

3名が金属探知機に御用となったが、何とか全員無事出国手続き通過。

<17:20> CX531便にて名古屋空港離陸。途中、台北の中正国際機場(空港)へ。トランジットルームでは、さっそく喫煙3人組が喫煙所に駆け込む。(機内禁煙)

<22:20> 香港着。あまりの広さに少し面食らったが、専用地下無人電車にてターミナル2へ。探知機はここでは1名OUT。(※印の人。彼はこの後もズーツと引っ掛かっていた。)

<23:55> CX291便にて香港発。この時、※印の彼が今度はダブルブッキングによりビジネスクラスへ。普通はラッキーというが、彼の場合悲惨なドラマが待ち受けていた。(一人離れた席で、しかも慣れない環境に、ボロボロになっていた。)

### ツェルマツへ

#### 7月14日(金)

<6:40> チューリッヒ着。入国手続きにて小嶋さん、緊張の面持ちで審査官の前に進む。そして思いもかけない日本語で質問され、頭の中パニック。(しばらく返す言葉が出てこなかった。)

空港駅へ向かうエレベータで少しスツタモンダし(2往復してしまう)、無事ホームへ。手で触れないと開かない列車の自動ドアに、一同妙に感動を覚える。

<8:39> 特急IC814にて空港駅発。サイレンスマークのついた客車を知ってか知らずか、車内販売のワゴンが来ると、早速ビール、つまみ等々を仕入れ、心地よい気分で車窓を楽しんだり、オシャベリに花が咲く。(注: Silence = 静粛)

ベルンを過ぎると、時折小雨混じりの空で遠望はきかないが、アルプスの山々が姿を見せ始める。懐かしのカandelシュテークを過ぎ峠を抜けると、列車は徐々に眼下にローヌ川を見下ろしながら高度を下げていく。

<12:00> ブリーク着。「さっむー!!」が第一声。駅から少し離れた「氷河特急」のホームに向

かう。車内に置かれてあった無料の鉄道パンフ(山の写真がきれい)を早速手元に。

<12:23> ブリーク発。ヴィズプを過ぎると、ラックレールのついた列車は谷間を縫ってグングン登って行く。空は相変わらず曇り気味だが、谷の両側に切り立った峰々が迫る。

<13:43> ツェルマツト着。駅の北側の出口を降りると、すぐ目の前にホテル『バンホフ』がある。チェックインには少し時間が早いのか受付に人がいなく、しばらくウロウロしていると、先客の日本人がオーナーさん(女性)を探してくれ、無事チェックイン。

1F黒瀧、前田、2F箕浦夫妻、3F小倉夫妻、4F前川夫妻、小嶋。いずれもマッターホルンが望めるはずの、窓が南向きの部屋。(本日は分厚い雲の中)

各自の部屋で荷物の整理後アルパインセンターへ予約確認に向かうが、4時半にならないとOPENしないため、近くのレストランで遅いランチタイムとする。パスタに色とりどりのチーズとハム、そしてもちろんビールで乾杯。ほろ酔い気分でマッターホルン組5名にてアルパインセンターへ。そこで予想もしなかった残酷な宣告を受ける。『ここ数日の悪天候によりルートはかなりの雪が付いており、今週は登攀不可能。滞在予定の19日まで待っても登れる保証はない』対応した相手の表情と口調から、来週まで待っても登攀の可能性は極めて少ないことが察せられた。体の芯から力が抜けていくのが分かった。現実を受け止めるのに少しの時間を要したが、とりあえず自分達を無理やり納得させる形で、代替提案の『モンテローザ』に急きょ変更し、予約を入れ宿に戻る。本日の夕食は、遅かったランチのため『ラーメン』で済ます。ほかの宿泊客(フランス人?)の豪華ディナーを横目に、大鍋を囲んで結構盛り上がる。(マッターホルン・ショックを忘れるためにも)そして明日からの夕食は、日本人は粗食と思われないうえにも豪華ディナーを作ろうと誓い合う。

## ブライトホルン

7月15日(土)

今日は当初の予定通り、全員でクライン・マッターホルンまで上がり、ブライトホルン(4,164m)登頂組と、フリーーまで下ってツムツト経由でツェルマツトまでのハイキング組の行動。大小合わせて3台のゴンドラを乗り継いで行く。間近に氷河が迫ってくる。最後の駅を降り、岩をくりぬいた暗くて長いトンネルを足早に行く。小嶋さんが「足元が少しふらつく」という。もうこの場所は富士山よりも高い(3,800m)位置にある。

トンネルを抜けるとそこは“厳冬期”だった...。「吹雪いとるうー!!」

それでも上空は多少明るく、時折視界も開けるので、とりあえず身支度を整え登頂を目指すことにする。メンバーは、小倉♂、前川♂、黒瀧と、前田、小嶋、箕浦♂の2パーティー6名。小倉♀、箕浦♀、前川♀3名は、氷河をくり貫いて造られた「アイスパレス」を見学後、ツムツト・ハイキングに向かう。

我々6名は完全冬山装備で出発する。スキーリフトの支柱を目印に緩いスロープを下りきり、先行パーティーのトレースに従って左手に進路をとると、そこはブライトホルンプラトーと呼ばれる大雪原が広がる。しかし強風のためトレースがすぐ見えなくなる。先頭をクマちゃんが行くが、新雪が20cm程積もっていて進むのに苦労する。ようやくプラトーを抜け取り付き地点に達する頃には、

風も少しおさまり上空に青空が広がってきた。ここでアイゼンを装着し、パーティー別にアンザイルンして登攀開始。ベルクシュルトと呼ばれるクレバス帯付近の通過も、雪に埋もれていて難なく通過。南側斜面を左にトラヴァースして登って行く。この頃になると、まだ抜けきっていない時差の影響や、高度障害等が重なってペースが落ちてくる。トラヴァースも終わり、右手に方向を変えて登り出す頃、みんなの疲れもピークに達し、特に信じ難いことに、あのクマちゃんの足が少しずつ止まりだした。プラトーでのトップがこたえたのか、頂上まであと少しの地点でついにリタイア。クマちゃん1人残し、5名にて頂上に向かう。ひたすら足元だけを見つめ上へ上へと足を持ち上げる。そして傾斜が緩くなったなと思ったとき、そこが頂上だった。



クライン・マッターホルンにて



ブライトホルン頂上(4, 164m)

前川さんとの熱い抱擁はなかったが、ガッチリと握手。「オツカレサンデスター！」

マッターホルンをはじめ、モンテローザ、ミシャベル山群の峰々は、白い雲でその全容を見せてはくれないが、雄大なゴルナー氷河が眼下に広がる。天空は日本の夏では見ることが出来ないような紺碧。バナナをほおぼり記念写真を撮って、しばらく4, 000mを堪能したあと下山にかかる。クマちゃんと合流し、トラヴァース帯を慎重に下って行く。斜面を抜けた所でザイルを解き、再び長いプラトーを歩き出す頃、視界がまた悪くなって来る。足元のトレースだけを頼りに行くが、やはり疲労の為か歩く速度が落ちてくる。特にクマちゃん和小嶋さんがシンドそう。ガスの中から不意に駅の姿が見えたときには、みんなボロボロ状態で、高度による頭痛に襲われ始めた。しかし前川さんだけが“ピンピン”している。(呼吸の方法を色々工夫していたらしい。エライ！)

とりあえず急いで高い場所から下がることにする。ゴンドラの中から雲の中のマッターホルンを食い入るように見つめていると、一瞬雲がわずかに切れた。そしてそこには雪でビッシリ被われたヘルンリ稜と東壁が現れた。みんな口を揃え、悔しさから逃れるように言った。「コリヤ無理や！」

街の駅に降り、駅の脇でヘトヘト状態で、着けたままだったハーネスを外しながら考えた。「こんな状態でモンテローザに登れるのか？」体調や山のコンディションが悪かったとはいえ、ブライトホルンは400m弱の高度差。モンテローザは1, 800mある。明日小屋まで移動して明後日登頂。「ちょっとキツくない...?!」みんなに相談するとほぼ同意見。とりあえずこの予約はキャンセルすることに決定し、アルパインセンターに直行する。昨日対応してくれたお兄さん(元ガイドのように見受けられる)に、我々の意向を説明する。彼は「モンテローザもここ数日決して好条件ではなく、賢明な決断かもしれない」と我々に告げた。そしてポリュックス、カストールを提案してくれる。フィ

ジカルコンディションが回復したら、必ずまたここに来ることを約束してセンターを後にする。

今日は夕食作る気力全くないから「外食！」と決めてホテルに戻り、全員爆睡。

しかしこの夜、ツムツ組の美人妻(?)達が、あったかいご飯と味噌汁の夕食を準備してくれ、日本を出てまだ3日目だというのに、その味は心にも体にも「ジーン」と沁みた。

## ゴルナーグラート～リッフェルベルク

7月16日(日)

予約キャンセルで今後の日程を話し合い、今日は体調回復の為に、のんびりとゴルナーグラートからリッフェルベルク辺りまでのハイキングとする。

今日の午後にツェルマツに到着する成田さんへのメッセージをフロントに預け、登山電車の駅に向かう。先頭の誰かが、身振り手振りと知っとる限りの英単語で、苦労して往復パスを手に入れると、後に続くものはみな「セイム、(Same)」の一言でGET！

電車はツェルマツの街並を抜け、ゆっくりと高度を上げて行く。樹林帯を抜け、リッフェルベルクの駅を過ぎる頃、辺りは牧草のなだらかな平原が広がってくる。そして雪を頂いた山々がその全容を現し始め、昨日登ったブライトホルンが右手の車窓に大きく広がる頃、終点のゴルナーグラートに到着する。ここはやはり人気スポットで観光客が多い(特に日本人)。とりあえず展望台に登り(3, 135m)、360度の景観を思う存分楽しむことにする。今日も部分的に雲に被われてはいるが、ゴルナー氷河を挟んでモンテローザ(4, 634m)が正面に迫り、その右手にリスカム(4, 527m)、カストール(4, 228m)、ポリックス(4, 091m)、そしてブライトホルンが続く。さらに右手に目を移すとマッターホルン(4, 478m)がその尖峰を天に突き上げている。その右にはダン・ブランシュ(4, 357m)、オーバー・ガベルホルン(4, 063m)、チナールロートホルン(4, 221m)、そして三角錐の美しいヴァイスホルン(4, 505m)が連なる。あいにくドーム(4, 545m)、テッシュホルン(4, 491m)などのミシャベル連山は厚い雲に被われている。しかしじっとしていると底冷えしてくる。駅にある簡易郵便局で絵葉書や切手を購入したあと、ぼちぼちと歩き始める。

この付近はまだ緑が少なく、露出した岩の上には所々うっすらと新雪が残っている。徐々に高山植物が見え始めるが、寒さのせいか花は小さい。小嶋さん、クマちゃんは一瞬レフ、ミノさんは“デジタル”で花や山を撮りまくり始める。みんな結構勝手に歩いているので、しだいに先頭と最後尾が確認できなくなるほど離れてしまう。そうこうしている内、後ろを歩いていた4人(黒瀧、前田、箕浦♂、小嶋)が行方不明となってしまう。ローテンボーテン駅に着いてしばらく待っていたがなかなか現れない。もしやフィンデルバッハ側のグリュンゼーの方に降りて行ってしまったのかと一時心配したが、まもなく線路を挟んだ向こうの丘のほうからひょっこり現れ、へらへら笑いながらこちらへやってきた。普段気遣いの多いリーダーばかりやっているの、その必要がなくなるとつい風船玉になってしまう。

ローテンボーテンの駅を下っていくと、「逆さまッターホルン」で有名なリッフェルゼーの湖畔に出る。湖の左手には岩登りトレーニングでよく利用されるリッフェルホルンが威圧的に迫っている。この湖畔でラーメンを作って体を暖めることにする。体を動かさないとやはり冷えてくる。しかしいくら

歩いて汗をかかないのがいい。湖の淵で泳いでいる小魚にえさ(行動食のお菓子)をやったりして遊んだあと、またのんびりと下り始める。青空も広がり、目の前のマッターホルンにかかる雲も少なくなってきて視界も良好。ヴァリスの壮大な名峰を眺めながら、お花畑の穏やかな草原を歩く。気分は『ハイジ♪♪』である。

羊の鳴き声が聞こえ出すとまもなくリッフェルベルクの駅に到着。駅の脇のレストランで軽い食事をする。テラスのテーブルで、山と上空を舞うパラグライダーを眺めながらビールとウィナー。「Ah~！ 至福、至福...。」



### リッフェルベルクへののんびりハイク

予定では今日はここまでのハイクだったが、体調も気分もいいのでリッフェルアルプの駅まで歩くことにする。しかし途中道を間違えかけたりして少しきつい行程になった。電車でツェルマットに戻りホテルに着くと、成田さんが玄関前のテラスのテーブルで本なんぞ開きながら我々を待っていた。さすが海外旅行の達人、1人でちゃんとここまでやって来とる。

今日の夕食は、全員揃ったところで予定通りの「外食」。オーナーさんに紹介してもらった2軒目の店に入る(1軒目は満員)。雰囲気のある少し薄暗い奥の席で、まずはビールとワイン、そしてチーズフォンデュにラクレット、その他色々(名前が出てこない)。基本的にチーズがベースの料理が多い。メニューに日本語が併記されているので悩まなくていい。小嶋さん、チーズフォンデュのワインがキツ過ぎて身も心も極楽(地獄?)状態になる。

### モンテローザ小屋 <氷河ハイキング>

7月17日(月)

今回のスイスの主な目的は「マッターホルン」であったが、もう一つぜひ訪れたいところがあった。それが今日の予定のモンテローザ小屋までの“氷河ハイキング”である。結構キツイ行程になるので、始発の電車に乗るため朝食は6時。地下の自炊場の電気コンロは6時半にならないと使えないので、EPIでお湯を沸かしパンとコーヒー、スープ、生ハムにサラダと、いつものパターンの朝食を手早に済ませる。

始発電車は上の工事現場で働く人やハイカーでかなり混雑している。昨日と同じゴルナー行き

の電車でローテンボーンに向かう。早朝の山々は凜としていて美しい。駅に近づく頃に“マーモット”を発見。カワイイのを想像していたが思ったよりデカイ(中型犬くらい)。駅を降り、昨日も訪れたリッフェルゼーに向かう。風も、さえぎる雲もないので、湖面には絵葉書のようなマッターホルンが映し出されている。

リッフェルホルンを背後に見ながら、ゴルナー氷河右岸山腹の道を歩く。右下の氷河まではまだ数百m以上ありそうな結構高い位置で、多少足元に気を使って歩く。最初少し登りがあるが、あとは氷河と平行しながらの下りが続く。この付近の石はどういう種類か知らないが、ほとんどが鉱石のようにキラキラ光っている(記念にPocket in)。左手上方遠くにゴルナーの展望台が見える位置までやってくる。ここからさらに下り続けるとしだいに氷河は近づき、やがて「ガドメン」と呼ばれる大きな岩が露出した小平地に着く。ここでしばらく休憩。昨日着いたばかりの成田さん、ヒーヒー言っている。ここから見上げるモンテローザは実に雄大で、氷雪に包まれた山肌は眩しく輝いている。



#### ポリュックス(右)とカストール

前川奥さんは、今日はこの地点でUターンという事になり、愛妻家前川さんも当然行動を共にすることに。しかし一度氷河の上に立ってみたいということで、妻をしばしここに残し氷河に向けて出発する。かなり高度差のある岩場で、ルートを探すのに苦労する。その年によって氷河の地形が変わるため、ルートも一定していないようだ。最後の降り口は、外傾したスタンスをへつりながら通過する嫌らしい個所である。

何とか全員無事に氷河の上に立つ。ここで前川さんとお別れ。先ほどの難所を無事通過するのを見届けて8名で出発にかかる。前川さん、「この時、みんなの視線を一斉に浴びて、かなり緊張した...。」<後日談>

氷河上には三角赤旗の目印が50~100m間隔で立っており、それを目標に進む。歩く足元の氷上には、幅1m、深さ30cm位の小川が何本か流れていて、その末端は深いクレバスの中に滝のように落ち込んでいる。氷の支柱に乗った5mくらいの巨岩が巨大霜柱のようで面白い。初めて経験するような景色を楽しみながらしばらく歩き続けると、氷河と氷河の合流部に出来た“モレーン”と呼ばれる小高い丘状になった岩稜帯に着く。ここで小休止。下山途中の数パーティーもここで休憩中で、中高年の日本人パーティーもいる。日本人ガイドを伴って、今朝小屋を出てきたとのことだ。モレーンを抜けて再び氷河に降りる。すると今までそんなに多くなかったクレバス

の数が増えてくる。しかも幅が少し広がり深い。ルートを選びながら、迫力のあるセラック帯を左手に見て進むと、モンテローザとリスカムの間から落ちるグレンツ氷河へ入る。岩の乱立する地帯を抜けると、左手に小屋に向かうルートとなっている岩の基部に着く。かなりキツそうな斜面に取り付けられたフィックスロープとヤバそうなハシゴが見える。それを見て成田さんビビり出す。みんなまで説得して出発。

取付き部の足元は不安定だが、フィックスロープの通過は見た目ほど難しくない。岩にへばり着くように取付けられたハシゴ帯を抜けると、あとは岩稜のジグザグの登りが続く。喘ぎ喘ぎ登りつめると、ようやくモンテローザ小屋(2, 795m)に着く。黒瀧、前田の2人のサポーターを従えた成田さんも、少し遅れて到着。

ヒュッテのテラスで、コーヒーとオレンジジュース、そしてビールを注文してのどを潤す。目の前のグレンツ氷河の奥には、リスカムの真っ白な北壁がそびえている。観光用のヘリが、小屋のヘリポートに降りてくるのをしばらく見物する。そしてしっかり体を休めたあと帰路につく。取付きの難所も危なげなく通過。これからヒュッテに向かうパーティーとすれ違う。今降りてきた難所の通過を興味深く見ていると、やや Big Hipの女性が、他のメンバーの手を借りながらジタバタやっている。成田さん、勝ち誇ったような眼差しでそれを見つめている。(しかし彼女はこのあと、クレバス越えの着地失敗でコケる。)



リッフェルゼーに映るマッターホルン



モンテローザ小屋の前にて

氷河歩きも終わりに近づき、対岸の岩場に取り付く頃、ヒュッテのスタッフらしき人がルート変更の為、重そうな目印用のポールを何本も抱えて上部から下ってくる。そして我々の目の前で氷に足を滑らせ、スッテンコロリンとやってしまった。なんと声を掛けてよいものか分からず、お互い少し気まずい雰囲気その場をすれ違う。

長い長いローテンボーデンまでの登りも終え、程よい疲れを残し下りの電車に乗り込む。街に戻り、黒瀧、前田、小嶋、箕浦、小倉の5名にて、アルパインセンターに向かう。前回提案してもらった、カストール、ポリュックスについての詳細を聞く。2山の縦走ルートとポリュックスの岩稜ルートの説明を受けたが、“ROCK”の言葉に敏感に反応した黒瀧氏、相談しあうまでもなく即決。明後日(19日)、ロープウェイ駅集合となった。

夕食準備までの間は、各自、生協で行動食の買出しや、お土産の品ために街をぶらつく。

## スネガー(オーバーロートホルン)

7月18日(火)

今日一日は基本的にはFREE TIMEであるが、黒瀧、前田、小嶋、前川♂、4名は明日の為のトレーニング及びエーデルワイスを見つけるという目的を持って、スネガーからウンターロートホルンまで上がりオーバーロートホルン(3,415m)をめざす。他6名は“骨休め”のため、スネガー付近の散策に決定。

我々6名が朝食準備のため炊事室に降りた頃には、先発4名はすでに出かけた後だった。のんびりと朝食を済ませ、ホテルから10分ほど歩いた川向こうにある地下ケーブルカー(Sunnegga Express)の駅に向かう。駅近くの気温表示板は4℃を示しており結構冷え込む。立山でよく見かける階段状になったケーブルカーに乗り、5分程でスネガーの駅(2,288m)に着く。この広場から見るマッターホルンの眺めは一級品といわれるが、絵葉書のままの姿が目の前に現れる。今日は時間もタップリあるのでロープウェイを2台乗り継いでウンターロートホルン(3,103m)まで上がる。雲一つない快晴で、もう何度も見ている名峰だが、一際鮮やかに見える。背後には、先発組みがめざしているオーバーロートホルンがすぐ近くに迫っている。人影を探すが見当たらない。(この時彼らは、山の裏手の雪が結構深いルートをラッセルで苦勞していたらしい。)

スネガーに戻る中間のプラウヘルトの駅でぶらぶらと時間待ちしていると、駅の建物の側面の壁全体にフリーの人口壁を見つける。難易度別にホールドが色分けして取付けてあり、垂直10mが6~7本ある。道具もシューズもないので下部だけで少し遊んでみる。先発組がここを見つけたら、一日中居座るに違いない。

スネガーの駅付近は観光客がかなり増えているので、駅から少し下ったライゼーの湖畔を散策することにする。

※ ドイツ語コーナー[ゼー(See):湖] Ex. グリュンゼーGruensee(緑色の湖)

この湖も逆さマッターホルンが美しい。水際には黒瀧氏の“天敵”がウジャウジャ跳び回っている。ミノさん何故か必死になって接写でそれを撮っている。どうも湖に移るマッターホルンと“それ”のツーショットを狙っているらしい。



ライゼー湖畔



フリー人工壁で遊ぶ



駅に戻り、レストランのテラスでランチタイムにする。オーダーは女性に任せ、とりあえずはビール。山とキレイなウェイトレスのお姉さんを眺めながらイイ気分になる。ミノさん例のごとく、アルコールが入ってウトウトし出したのは良いが、お日様に顔を正面に向けて寝ているものだから、ただでさえ雪焼けでボロボロの顔が悲惨な結末を迎えることになる。

シッカリくつろいだ後、早めの時間にツェルマットに下る。各自夕食準備までの間自由行動。お土産の仕入れに精を出したり、ブラブラと街中を散策する。

#### <ツェルマット タウンガイド>

この街は環境保護に気を配り、一般自動車の乗り入れは禁止され、街中の交通機関は馬車と電気自動車に限られている。また建築物もコンクリートは制限され、窓辺に花を飾ることまで法律に定めているほどである。駅前から教会付近までがメインストリートで、たった200mの間に、お土産物屋、レストラン、ホテルが並ぶ。登山用品店も多い。

ガイド組合の建物も通りの中心部にあり、この建物の脇を少し入ると山岳博物館がある。館内にはウィンパー愛用のピッケルや切れたザイルも展示されている。

## ポリュックス & サースフェ

7月19日(水)

ツェルマット滞在最終日となった。黒瀧、前田、小嶋、箕浦♂、小倉♂5名は、ポリュックス登頂を、前川夫妻、小倉♀、箕浦♀、成田5名は、ツェルマットから山一つ隔てた、サースフェをめざす。

ポリュックス組は早めの朝食を済ませ、ロープウェイの駅に向かう。天候は良さそうだがやはり冷え込む。駅に着きしばらく待っていると、肩にザイルを掛けたガイドらしい人が数人やって来る。そのうちアルパインセンターの例のお兄さんもやって来て、ガイドを紹介してくれる。パーティーは二つに分け、個人で予約した1人(ドイツ人)を加えて3名+ガイドの、6名2パーティーで行動する。二人とも、地元のスイス人ガイドのようだ。

ゴンドラに乗り込む頃にはかなり人も増え、列を作って順番を待つ。我々以外はほとんどスキーかボードを抱えた“若い”連中ばかりである。(ピチピチギャルもたくさんいる。)

クライン・マッターホルンに着き、早速準備にかかる。当初パーティー編成は、2人+他1は前田、箕浦。3人パーティーは黒瀧、小嶋、小倉と決めておいたはずだったが、準備が出来しだいガイドが勝手にザイルを結び始める。気がつくと、小倉、小嶋、箕浦パーティー、黒瀧、前田+1パーティーが出来上がっていた。“ナスガママ”という感じである。

4日前は吹雪だったが、今日は快晴。さすがに小嶋さんは日焼け止めクリームでシッカリ防御体制。他の4名はここでも“ナスガママ”である。

最初は、ブライトホルン登頂の時と同じコースをたどる。今日はブライトホルンも麓から頂上までシッカリ見える。ザイルでつながれた我々は、猿回し状態でプラトーを黙々と歩く。かなり良いペースでブライトホルン取付き付近の分岐点を通る。ここからしばらく下りが続くが、小一時間歩いているにもかかわらず、一向に休憩をとる気配がない。マッターホルンのガイドもほとんど取らないと聞いていたので、驚きはしないがやはりシンドイ。180cm以上もある長身のガイドの長いコン

パスは、我々が2歩進むのを1歩で済ませる。しかも速い。

今まで目にすることが出来なかったブライトホルンの東側の岩稜帯を、横目に見ながらひたすら歩く。ペースが少し遅いと感じたのか、先頭を歩いていた我々のパーティーは、後続の黒瀧パーティーにトレースを譲り、少しルートを外れて歩く。これが後々ひびいた。雪の締まっていない箇所は足首までシッカリ埋まり、体力を消耗する。ペースも速いのでかなりキツイ。

本ルートに戻っていくらか楽になったが、3人ともアゴを出しかける。ようやくポリュックスの基部に着き、岩の混じった尾根に取り付く。小嶋さん少しシンドそうで、ガイドもそれを見て、少し登った所で一本取ってくれる。おそらく短い休憩であろうと思い、急いで水分と行動食を補給する。ガイドはおもむろに我々に背を向け、小用をたし始める。そして軽やかに一発“放屁”する。なんと大らかなんだろう...

岩稜をしばらく登ると、いよいよこのルートの核心部に着く。最初はベツタリした一枚岩を7~8mのトラヴァース。クサリがフィックスされてあるのでいくらか安心である。ガイドに続き、小倉、小嶋、箕浦の順で通過する。ガイドは手際よくザイルで我々を確保する。小嶋さん、リーチが足りず、クサリをつかむのに苦労している。この後は凹角状で傾斜の強い登り。左右のスタンスを横向きに突っ張りながら攀じる。ここもホールドの間隔が長く、小嶋さん苦労の連続。最後のピッチは快適なフェース。岩がシッカリしていて気持ちが良い。ようやく核心部を通過すると、平らな雪稜に出る。大きなマリア像が我々を迎える。小嶋さん一瞬ここが頂上と勘違いするが、めざすピークは目の前にのびる急な雪稜のもう少し先と分かり、ちょっとガッカリ。ここで長めの休憩を取る。

頂上の方向を眺めていると、黒瀧、前田パーティーが降りてくるのが見える。二人とも顔は笑っているが、かなり疲労の色が感じられる。

我々もアイゼンを付け出発にかかるが、やはり酸素不足の為か思うようにスムーズに足が運べない。雪面の足元だけを見つめ、頭の中で「もう少し、もう少し」と念仏を唱えるように言聞かせながら登り詰めると、ようやく頂上に達する。

ガイドと握手を交わし、ひと時の達成感に浸る。頂上はかなり狭く、思うように移動できないので、3人重なるようにして記念写真を撮ってもらう。ここからは、リスカムやモンテローザがすぐ間近に迫り、一昨日歩いたゴルナー氷河やモンテローザ小屋も足元に見える。



最終ピッチのフェースを攀じる



ポリュックス頂上(4,091m)

休憩も短時間で済ませ下りにかかる。マリア像の地点からルートを右に取り、転げ落ちそうな急

勾配の雪面を、ミノさん先頭に下る。雪の締りが悪く、アイゼンが思うように効かない。長い下りを終え、左にトラヴァースして取付き地点を通過する。ここから少し下った広い平らな場所で長い休憩を取る。結構我々のペースに気を使ってくれているのが解る。女性(?)がいるとやはり違う。

ガイドの彼は、テッシュに住んでいるとのことだ。寡黙でいかにもアルパインガイドといった風貌である。黙っているのも何なので、分かってはいるけれど、「あの山の名は何というの?」とか「あの麓に見える家はイタリア?」と他愛もない質問をしてみる。すると、やはり聞かれたことだけを物静かに答えてくれる。(高倉 健ふうに)

帰路はさすがに長く感じた。小嶋さんのペースが落ちてくるので、ガイドもそれに合わせてくれる。プラトーへの登りも終え、あとは傾斜の少ない長い雪原を駅に向かって歩く。全行程6時間を費やし、ようやくクライン・マッタホルンの駅に着く。再びガイドと握手を交わし、お礼を述べる。小嶋さんも思わずかけより、ガイドのお兄さんに抱きつく。お兄さんも優しく肩に手を回す。

ン...!? コッ、コッジマサンが... 若いオトコと抱き合っとるう ~ !!!

<スイスアルプスに衝撃が走った...>

ガイドに『下に降りてビールでも』と20SFを渡す。ついでに富士山のテレカもプレゼント。彼は表情を崩して喜んでくれた。

黒瀧、前田両人と合流し(彼らは1時間前に行動を終了していた)、下りのロープウェイに乗り込む。黒瀧、前田パーティーも何やら色々あったようで、ゴンドラの中でその報告を聞き、馬鹿笑いしながら降りてきた。

ホテルに着くが、サースフェ組はまだ戻っていないようなので、少し休憩して生協に夕食の材料を仕入れに行く。そして炊事場で準備をはじめていると、サースフェ組がようやく到着。しかも夕食材料の分厚い牛肉をドサッと買って来た。一同、調理台の上に並んだ大量の食材を見つめ小さなため息をつく。でも何とかなるだろうということで、すべてを調理することに。そうしたら、何とかなかった。(帰国して体重計に乗り、悲鳴を上げるのは誰?)

ホテル・バンホフの最後の夜は、ひたすら装備とお土産のパッキングに明け暮れる。

## チューリッヒへ

### 7月20日(木)

瞬間に過ぎた1週間であった。なにか忘れ物をしたような気持ちを心の片隅に残したまま、そしてチョッピリの充実感にも満たされて、この街に別れを告げようとしている。

ホテルのスタッフに見送られ駅に向かう。

<10:10> ツェルマット発。車窓からはマッターホルンの姿は望めないが、真っ白なブライトホルンがしばらくの間、我々を見送ってくれる。

<11:33> ブリーク着。重くなったスーツケースをゼーゼー言いながら、ホームまでのスロープを押して行く。まもなく電車が到着。手際よく荷物を連結部のスペースに詰め込み、サイレンスマークの付いていない座席を確保。それほど混み合っていない。

<12:00> ブリーク発。ローヌ川がしだいに遠ざかって行く。峠を抜け、ヴァリスの山々と別れ

を告げる。車内販売のおじさんがやって来たので、早速ランチタイム。ビール片手にサンドウィッチをほおぼる。隣の座席の4人連れの母子も、お弁当を広げている。東洋人がめずらしいのか、小学生くらいの女の子がチラッ、チラッとこちらに目を向ける。高い峰々が遠くなり、牧草の平原がいつまでも続く。そして次第に家々の数が増えだす頃、列車はベルンに着く。ここから進行方向を変え、後はひたすらチューリッヒに向かって走り出す。

<15:16> チューリッヒ着。ホームを出て、ホテルに向かうためタクシー乗り場を探すがなかなか見つからない。前川奥さん、駅の売店のお姉さんに聞いてみるがやはりよく分からない。大荷物を引きずってみんなでウロウロしていると、チューリッヒに在住している雰囲気日本人女性が、見るに見かねて我々をホテルバスの乗り場まで案内してくれる。(ホテルバスについてはぜんぜん頭の中になかった...)。おまけにバスの色まで教えてくれ、一同尊敬の眼差しで女性にお礼を言い別れる。間もなくバス(10人乗りくらい)がやってきて、連結車に荷物を詰め込み車中の人となる。

ホテル・ルネッサンスに到着。我々の身なりからしてちょっと場違いな感じの豪華なロビーに、少し緊張。チェックインと夕食の予約を済ませ各自部屋に入るが、部屋もなかなかいい。テレビの画面に『Welcome...Mr. & Mrs. Kogura』とか言う文字が映っている。バスタブもある。(バンホフはシャワーのみ) さすが☆☆☆ホテルである。

予約を入れたはずの夕食が、うまく伝わっていきなかつたモンダするが、難しいことは成田さんに任せ、我々はテーブルに着き、食事が運ばれてくるのをひたすら待つ。やがて目の前に並べられたスープやらメインディッシュを、ちょっとだけお上品に頂く。しかしナイフやフォークがゴロゴロ並んでいるのは実にうつつおいしい。真っ白なテーブルクロスの上に日焼けで剥がれた顔の皮膚がポロポロ落ちるのが気になる。

とにかく、あっという間に過ぎ去った1週間を振り返りながらグラスのワインを傾け、ツェルマット生活の話に花を咲かせる。クマちゃんめずらしく目がウツロになっている。

## 帰国

### 7月21日(金)

ホテルバスにて空港へ。チェックイン後、各自自由行動。免税店めぐりなどして時間をつぶす。小嶋さん訳のわからない酒を手に取り、「ワカさん(若原さん)こんな酒飲むかな?」と聞くので、「ワカさんが飲めん酒なんて無いやろ。」といったら、納得してそれを購入する。(いったいあの酒は何だったのだろう...?ラベルの文字がぜんぜん読めんかった...)

<14:10> CX290にてチューリッヒ発。食べてばかりの長い旅が始まる。(機中泊)

<7:50> 香港着、出発が遅れるようで2時間ほど待つ。前川さん、成田さんラーメンを食べている。(機内食だけでは足りない?)

10時過ぎに香港を飛び立つ。往路と同じく台北経由で名古屋空港へ。全員無事に入国できた。(もちろん黒瀧氏も) お出迎えはやはり前田真澄さん。

現地解散にて、各自自宅へ向かう。

このあと全員、日本の猛暑に打ちひしがれる。